

LED事業

～明るすぎず、暗すぎず～

執行役員 照明・LED担当室長 田部泉

「2006 Miyaji LED year. 2006年をLED元年にしよう!」
まだLEDという名称が世に知れ渡る前の、2005(平成17)年初春の頃でした。宮地彌典社長から力強く示された言葉に勇気づけられ、「LEDを活用して心地よい照明計画を実践する」ことを念頭に置いてLED照明の普及を目指し、貢献できるよう努めてきました。

以来、LEDに目を向けて10年が経ちました。

これまでの仕事から「四国八十八ヶ所巡り」という文化が根付く地に蠟燭灯火のイメージをLEDで実現した事例をご紹介します。



四国別格霊場第4番札所
鯖大師本坊



四国別格霊場第4番札所の鯖大師本坊は、徳島県海部郡の八坂八浜の真ん中に位置しています。巡礼地の中で難所のひとつとされる霊場は1993(平成5)年2月に改修落慶しました。鯖を3年絶って祈念すると願いごとが叶い、病気が治り、幸福になると伝えられ、いつしか「鯖大師」と言われるようになりました。

本堂東の山腹をくり抜いて造られた全長約88mある大洞窟の照明は、当時は四角い広角配光のハロゲンランプ100Wのスポットライトを20台使い天井から直接照らすものでした。照明は約4.4mに1台といったところでしょうか。しかし、この間隔では照射範囲を賄うことができているとは言い難く、明るいと暗いところの照度ムラが大きくて不快グレアがあり、眩し過ぎるという印象でした。

2008(平成20)年10月頃、大洞窟と護摩堂のLED化に向けて照明設計の依頼があり、試行錯誤しながら進めてゆくことになりました。まず、基本的な照明の考え方を以下の3点にしました。

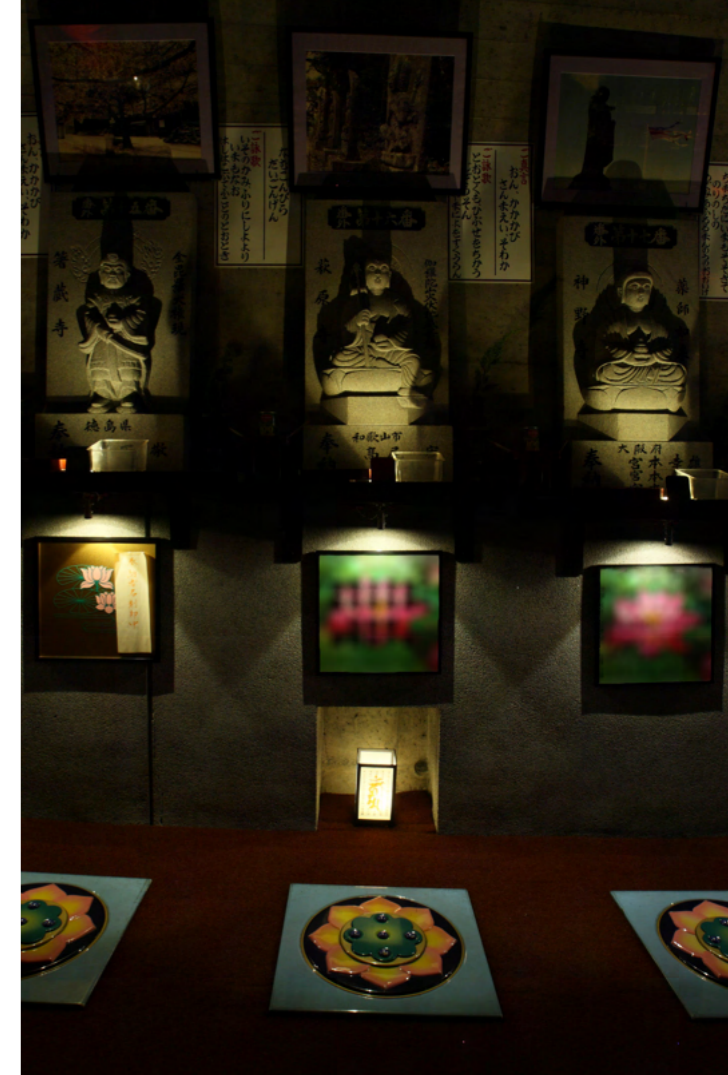
1. 不快グレアを少なくする
照明方法を検討する
2. 明るすぎない空間にする
薄明りの中での祈り。蠟燭の灯火をイメージする
3. 暖かな色味にする
大洞窟、石像、金色の大不動明王像などを神々しく魅せる

大洞窟の左手側面には108体の仏像が祀られていますが、一番の問題は仏像の上部から照射された光による不快グレアです。その改善策として光源の位置を変更し、仏像ごとに下から上向きに照射する方法としました。

また、仏像の足元にある各霊場のお砂を納めた蓮華台と、壁面に設置している説明表示板を同じ光源で製作したLED小型スポットライトで照らすようにしました。

大洞窟の右手側面に位置する不動尊奉安殿の展示ショーケースも、同様のLED照明に筒形カバーをかぶせてグレア防止につなげました。そして2009(平成21)年1月には、壁面足元近くにある点検用スペースへ和紙で包んで製作したLEDスタンド照明を26台設置して付近を照らし、大洞窟の照明が全て完成しました。

一方、この大洞窟の奥には護摩堂があり、堂内には全国の信者様御祈願大不動明王像が多数祀られています。この御祈願大不動明王像を手前下よりLEDライン照明(消費電力2W/m、色温度3,000K)で照らして薄暗い中にも全ての大不動明王像をより金色に魅せ、煌びやかさが強調される神秘的な世界を演出しています。



全ての照明施工を終えた鯖大師の大洞窟に一步足を踏み入れると、まさに「幽玄」という言葉にふさわしい凜とした気高い雰囲気になります。

これ以上明るくても、これ以上暗くても成り立たない神聖な空間をLEDで実現した事例です。

LEDは、省エネ・長寿命の照明として使われ始めた2010年頃から飛躍的な進化を遂げ、今では私たちの生活に広く普及しています。最近では配光・演色性・色味などLEDに照明としての「質」が加わり、これからは時刻や天候、活動スタイルに合わせて光量や色味を変化させる「制御」と組み合わせる使い方がポイントとなります。それには単に明るくするだけでなく、良質な光環境を築くための綿密な計画と専門的な知識が求められます。

「必要な場所に、必要な光を」

当社が長く力を注いできた、「良い照明文化を育むこと」を使命に、10年後も愛される光環境づくりのお手伝いをしてゆきます。

